中国南北朝時代の敦煌莫高窟における中心柱窟の展開

齋　藤　龍　一

はじめに

敦煌莫高窟は甘粛省の西端に位置する中国を代表する石窟の一つである。大泉河西岸の崖に南北1600mにわたり上下数層に重なって開かれており，編号されている石窟は492窟を数える。その開窟は前秦（4世紀後半）に遡るとされるが，当初の石窟は残っていない[1]。

現存する石窟の中で最も早く開かれたものをはじめとして，南北朝時代に造営された石窟の造営年代については，紀年銘を有する石窟がほとんどないこともありなかなか研究がすすまなかった。しかし80年代に入り，敦煌研究院（当時の敦煌文物研究所）の樊錦詩・馬世長・関友恵の三氏によって「敦煌莫高窟北朝期石窟の時代区分」が発表された。このなかで南北朝時代に造営された石窟を36窟とし，次のように分期が行われた[2]。

第1期　北涼の敦煌支配時期　421年頃——439年頃
第2期　北魏中期　465年頃——500年頃
　雲岡石窟開窟時期から北魏の洛陽遷都頃まで
第3期　北魏孝昌元年以前—西魏大統十一年頃　525年以前—545年頃
　東陽王一族が敦煌を支配した時期
第4期　西魏大統十一年——隋開皇四年　545年頃——584年頃
　建平公于義が敦煌を支配した時期を中心とする

敦煌研究院の三氏によるこの分期（敦煌研究院分期）は，現存するすべての石窟を網羅した調査に基づいており，現在では莫高窟の南北朝期窟を考察する上での基準とされている。しかし必ずしもすべての研究者の意見が一致しているわけではない。例えば第1期に属する第268窟・第272窟・第275窟の三窟は北涼の造営とされるが，北京大学の宿白氏は

「敦煌莫高窟現存早期洞窟的年代問題」において，この三窟を莫高窟現存最古の石窟と認めるものの，その年代を北魏とする説を発表している[3]。

南北朝期窟のうち造営年代が明確な石窟は，西魏大統四・五年(538・539）の紀年銘を有する第285窟のみである。そのためこの敦煌研究院分期では大同雲岡石窟の造営年代との関係や，東陽王元栄や建平公于義の敦煌派遣といった歴史的事象に重点が置かれて編年が行われている。しかし第1期から第2期，第2期から第3期までの間には，それぞれ約25年間も造営が断絶した期間があったとするのは不自然といえるだろう。また第2期と第3期の石窟を区分する特徴の一つとして，如来像の着衣が西方式であるか漢民族式に変化しているかという相違が挙げられている。しかし第3期に属する石窟のなかにも西方式の袈裟を着けた如来像が造られるなど，服制の変化と石窟の分期は必ずしも対応しているわけではない。

一方，石窟の形式をみるとおよそ半数の16窟が，石窟内の中央部を方形の柱状に掘り残し，そこに龕を開き造像を配して柱を礼拝の対象とする構造の，いわゆる中心柱窟である[4]。中心柱窟はインドのチャイティア窟に起源が求められるとされるが，莫高窟では中心柱窟は第1期にはみられず，第2期と第3期を中心に隋代まで造り続けられている。これら莫高窟の中心柱窟に関しては，中心柱の形式が二層から一層へ変化するという大まかな流れが指摘されるほかは，これまであまり注意されることがなかった。しかし筆者は二度にわたって莫高窟を実見する機会を得たが，中心柱窟には中心柱の形式や龕の形式・内容をはじめとした様々な相違点があり，これを元に中心柱窟群をいくつかのグループに分類することができることに気付いた。そして先学の研究を踏まえつつ，南北朝時代に開かれたとされる中心柱窟の形式分類を行った結果，中心柱窟群を四つのグループに分類すると共に，これらの石窟の造営順序についてもある程度明らかにすることができた。

小論ではまず中心柱窟と関連する，西インドをはじめとする西方の石窟について概観する。

第1章　中心柱窟の源流

〈A〉西インド

一般に中心柱はストゥーパを表現したものとされ，中心柱窟の源流は，西インドを中心に分布するチャイティア窟にあると考えられている[5]。チャイティア窟は窟奥にストゥーパを安置した，礼拝のための石窟である。西インドのチャイティア窟のうち最も規模が大きく典型的といえるのが，紀元後2世紀に造営されたマハーラーシュートラ州カールリー石窟のチャイティア窟である（図1）[6]。このチャイティア窟のプランは奥行38m，幅14m，高さが14mで，窟内は身廊と左右の側廊に分れている。身廊の奥に安置されるストゥーパは半球形の伏鉢形になっており，頂部には平頭がある。この平頭部には傘蓋が立てられていたと思われ，さらにその内部がくりぬかれていることから，ここに舎利が納められていたと考えられている[7]。西インドの石窟寺院では，このようなチャイティア窟と複数のヴィハーラ窟（僧坊窟）を組合わせて造営されることが多くみられる。たしかに石窟の内部にストゥーパを配するという点を重視するならば，西インドのチャイティア窟を中国の中心柱窟の源流とすることに異論はない。しかし中心柱窟を「石窟の中央部を柱状に掘り残し，この柱に龕を開き造像を配する」という構造を持つものと定義すれば，西インドのチャイティア窟を中心柱窟と呼ぶことはできない。なぜならば内部に柱を掘り残す中心柱窟と，伏鉢形のストゥーパを安置する石窟とでは，石窟の構造そのものが異なっており，また中心柱は舎利を納入する機能を有しない点においても，伏鉢形のストゥーパとは大きく異なるからである。

それでは中心柱窟という石窟形式は，どの地域に直接の源流を求めることができるのだろうか。

〈B〉西北インド

西北インド，ガンダーラ周辺では，石窟の中央部を柱状に掘り残す構造の石窟が，バサーワル石窟やフィル-ハーナ石窟，シアーコー石窟など合わせて10窟程度確認されている[8]。特に造営年代が最も遅いとされるバサーワル石窟では，中国で造営された中心柱窟に近い構造の石窟がみられる。ジェラーラーバード付近のカブール河左岸に位置するバサー

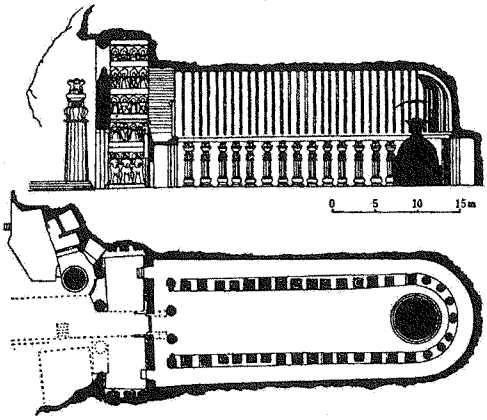

図1 カールリー石窟チャイティア窟 平面·側面図

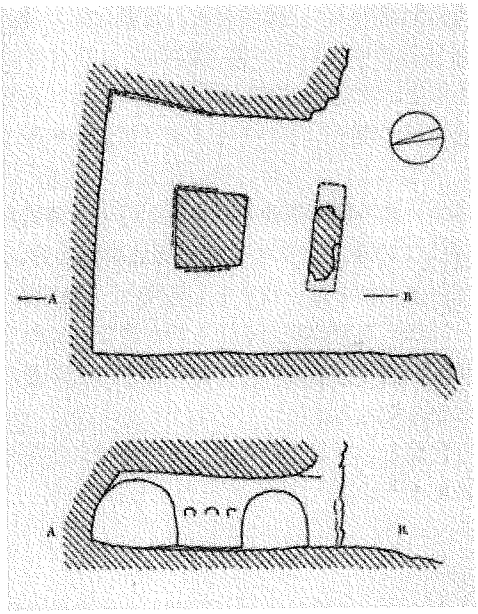

図2 パサーワル石窟第70洞 平面·側面図

ワル石窟は京都大学の調査によりA～H区の150窟が編号され，造営年代についてはハッダの盛期に平行する350年～550年と推定されている[9]。バサーワル石窟の第70洞はプランが縦横9mの方形で，窟口が二つあり，中央には一辺2.5mほどの柱状の掘り残しがある。窟頂部はヴォールト天井である（図2）。また窟内には，壁面全体に描かれていたと推測される坐仏列像の一部が残存している。

バサーワル石窟ではこのほか，同様に中心柱を有する石窟が4窟発見されている。これらの石窟の中心柱について水野清一氏は，「その方柱は聖なるもの，礼拝の対象である。たんなる方柱ではない。」と指摘している[10]。以上のように西北インドでは，石窟の中央部を柱状に掘り残し，その柱を礼拝の対象とする構造の石窟が造営されたことが確認されている。このことから，中国で造られた中心柱窟の源流は，西北インドまで遡ることができると思われる。

〈C〉新疆地方

新疆ウイグル自治区には数多くの石窟が分布しているが，特に石窟の造営が盛んであったのは，クチャとトゥルファンの二地方であった。このうちクチャを代表するのがキジール石窟である。キジール石窟の造営年代には諸説ありはっきりとしないが，遅くとも5世紀には造営が開始されたとされる[11]。このキジール石窟で最も多い石窟形式は，「亀茲式」と呼ばれる中心柱窟である（図3・4）[12]。「亀茲式」中心柱窟の基本プランは主室と後室からなり，主室正壁の左右から後室へ二本の通路が通じている。窟頂部は多くがヴォールト天井である。主室正壁には龕内に趺坐仏像があり，龕の周囲と天井には山岳などが描かれている。さらに主室前壁の窟口上には弥勒菩薩の兜率天説法図が描かれている。また後室奥壁には涅槃図（像）があり，そのほかの壁には荼毘図や舎利塔図など涅槃に関連した主題が描かれることが多い。

「亀茲式」中心柱窟は，正面にのみ龕が開かれることが多い。また石窟内を繞ることにより，釈迦の涅槃から未来仏である弥勒へのつながりを体験できるパビリオン的な側面を持つという独自の発展をみせている[13]。一方，ガンダーラで建てられた地上寺院のストゥーパには，ストゥーパを廻る繞道に沿って仏伝が浮彫りされ，礼拝者は右繞することによって釈迦の生涯をたどることができる構造になっている。以上のよう

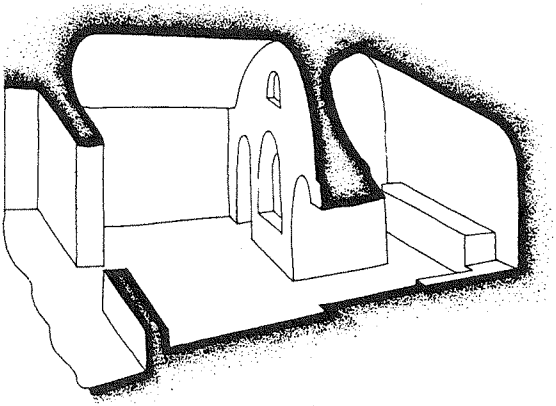

図3 キジール石窟中心柱窟 透視図

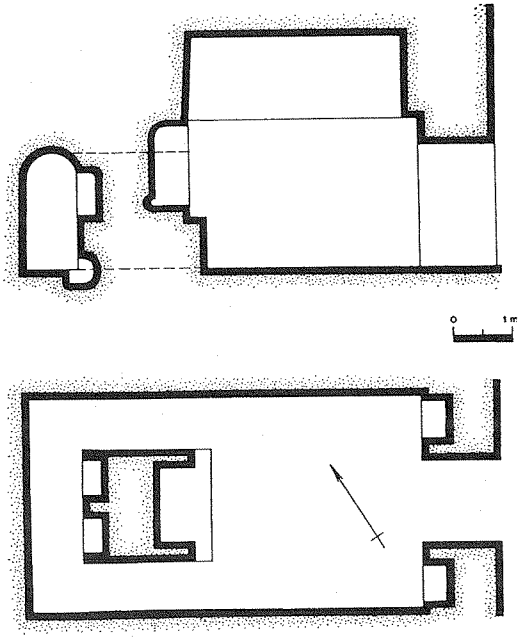

図4 キジール石窟第38窟 平面・側面図

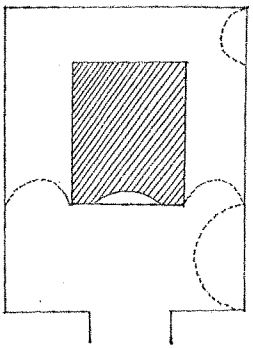

図5 トヨク石窟第38窟 平面図

な類似点から「亀茲式」中心柱窟の構造は，ガンダーラの地上寺院のストゥーパとも関係があるものと思われる。

一方，トゥルファンは早くに漢民族の支配下に置かれたこともあり，東方からの影響や支配を受けていた地域といえる[14]。このトゥルファンを代表する石窟がトヨク石窟である。トヨク石窟では中国編号の第2窟，第12窟，第38窟の中心柱窟が現存している[15]。

第38窟のプランは長方形で，中心柱四面に各1龕開かれ，ヴォールト天井には莫高窟の中心柱窟と同様にラテルネンデッケ図案があり，側壁には千仏図と共に因縁故事図が描かれている（図5）。また第12窟も第38窟と同様で中心柱四面に各1龕開かれ，ヴォールト天井にはラテルネンデッケ図案が描かれている。窟の前部は既に崩壊しているが，中心柱左面には趺坐像の一部が現存し，正面には交脚像の脚部らしきものが確認できるという[16]。トヨク石窟の中心柱窟は，莫高窟と共通する点が多くみられるが，造営年代は6世紀頃と推測されている[17]。そのため莫高窟に先行して開かれたと断定することはできず，莫高窟からの影響を受けた可能性も否定できない。いずれにせよ莫高窟と密接な関係があったと捉えるべきだろう。

まとめると，次のようになる。新疆ではクチャとトゥルファンの二地方の石窟で中心柱窟が造営された。しかしキジール石窟の中心柱窟は，

①中心柱の正面にのみ龕を開くことが多い。

②石窟奥に釈迦の涅槃場面，主室前壁の窟口上に弥勒菩薩の兜率天説法図を配し，釈迦から弥勒へのつながりを強く示している。

これに対してトヨク石窟の中心柱窟は，

①中心柱の四面に各1龕を開く。

②側壁には千仏図と共に因縁故事図を描く例がみられる。

このようにクチャのキジール石窟とトゥルファンのトヨク石窟では，窟内の図像構成が大きく異なっており，莫高窟の中心柱窟との関連で注目されるのはトヨク石窟であった[18]。

以上，西インドから西北インド，新疆の各地域に開かれた石窟のうち，特に中国の中心柱窟と関連すると思われる石窟について簡単に述べた。そのなかで中心柱を有する石窟形式の源流が西北インドまで遡れ，トゥルファンを経由し敦煌へと伝えられた可能性のあることが明らかとなった。

〈D〉中国の中心柱窟

(a) 中心柱窟に関する漢訳経典

漢訳経典のなかには中国の中心柱窟を考えるうえで参考になるものがいくつかみられる。例えば5世紀初頭に弗若多羅・鳩摩羅什らによって，律経典では最も早くに漢訳された『十誦律』に次のような記述がある[19]。

「又作是言。仏聴我作窟者善。仏言。聴作。又言。仏聴。我窟中作塔者善。仏言。聴窟中起塔。」　(巻48)

「仏言。聴作。仏聴我施柱作塔者善。仏言。聴作。仏聴我以彩色赫土白灰荘厳塔柱者善。仏言。聴荘厳柱。」　(巻48)

「龕塔法者。仏聴作龕塔柱塔。」　(巻56)

『十誦律』にはさまざまな起塔の方法が記されている。そのなかにはここに挙げたように石窟内における起塔や，柱に装飾を加え塔を表現し，彩色などを加えて荘厳化する例も示されている。このことから遅くとも5世紀初頭には中心柱窟という石窟形式が中国に伝わっていたと推測される。では実際の石窟はどのような構造であったのだろうか。

(b) 中国河西地方（敦煌以東）の中心柱窟

敦煌以東においても，河西地方の諸石窟をはじめ，大同雲岡石窟，隴東諸石窟，洛陽鞏県石窟，河北響堂山石窟など各地の石窟に中心柱窟がみられ，その多くが南北朝時代に造営された。特に河西地方では酒泉文

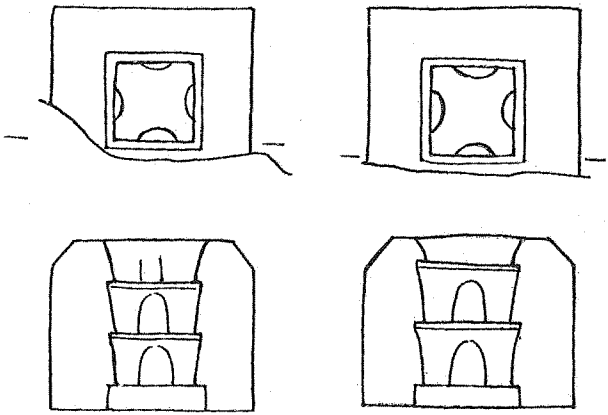

図6 天梯山石窟第1窟(左)・第4窟 平面・側面図

殊山石窟，張掖馬蹄寺石窟，金塔寺石窟，武威天梯山石窟など数多くの中心柱窟が分布している。これらの石窟の造営年代ははっきりしないが，宿白氏は武威天梯山石窟第1窟・第4窟を北涼に開かれた最初期の石窟と推定している[20]。

天梯山石窟第1窟・第4窟は共に中心柱窟である（図6）。しかしその構造は新疆キジール石窟の「亀茲式」中心柱窟とは異なっており，トルファンのトヨク石窟の中心柱窟に近いといえる。天梯山石窟第1窟・第4窟のプランは共にほぼ正方形である。中心柱は四面とも基壇上が二層ないし三層に分かれ，各層には龕が開かれている。残念ながら龕内の造像や壁画のほとんどが失われている。中心柱の形態は各層とも下から上方に向かって広がっており，上層の龕外には細いテラス状の足場が造られている。また北魏の造営とされる酒泉文殊山石窟前山千仏洞・万仏洞も共に中心柱窟である（図7）[21]。両窟の規模や構造はほぼ同じで，プランは正方形である。中心柱は四面が二層に分かれており，各層に1龕開かれ龕内には趺坐仏像が配されていたと思われる。龕外には天梯山石窟と同様に細いテラス状の足場が造られ，龕の左右に脇侍立像が配されている（図8）。さらに文殊山石窟前山千仏洞・万仏洞と同様に北魏に造営されたとされる張掖金塔寺石窟の東窟・西窟も中心柱窟である（図9）[22]。両窟の規模や構造は似通っており，プランは正方形を呈している。両窟の中心柱は共に，四面とも基壇上が三層に分かれている。こ

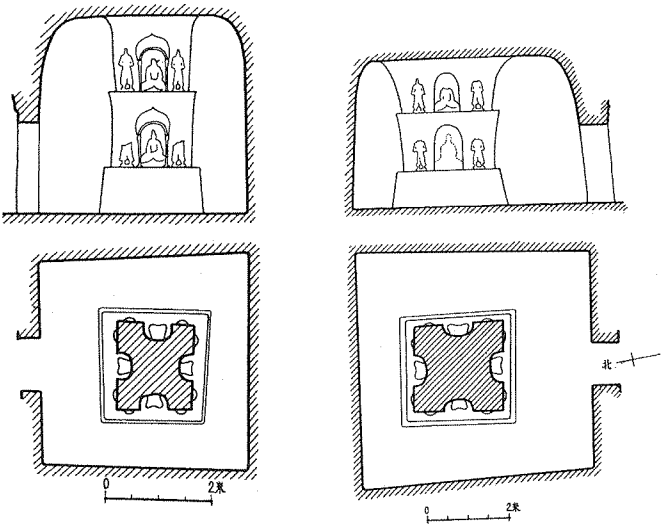

図7 文殊山石窟千仏洞(左)・万仏洞 平面・側面図

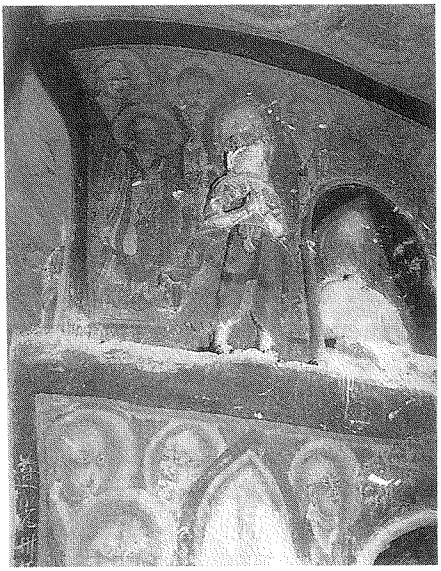

図8 文殊山石窟万仏洞 中心柱南面上層

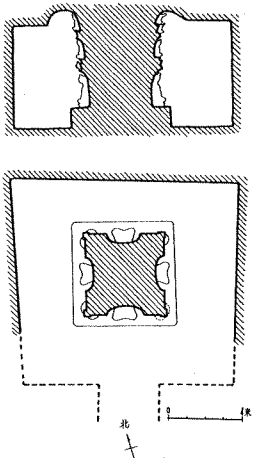

図9 金塔寺石窟東窟 平面·側面図

図10 金塔寺石窟東窟 中心柱西面

の金塔寺石窟東窟・西窟の中心柱を特徴付けているのは造像の数と種類の多さといえ，東窟の中心柱中層には浅龕内に趺坐仏像のほか交脚仏像や苦行仏像が配されている（図10）。また中層の浅龕外に細い足場があり，ここに脇侍菩薩立像が配されている。

敦煌莫高窟に先行あるいは併行すると思われる，河西地方の中心柱窟は，西北インドや新疆の中心柱窟とは異なり，中心柱の四面を上下二層あるいは三層に区分し，数多くの龕を並べるのが大きな特徴といえる。このことから莫高窟の中心柱窟の構造や中心柱の形式は，西北インドや新疆の石窟以上に，河西地方の諸石窟との間に共通点が多くみいだされることがわかった。しかし莫高窟の中心柱窟は，中心柱の側面が二層に区分されても正面のみは一層であり，窟頂の形式は前部に人字披を築き，後部は平頂とする，といった特徴を持っており，これらの点では河西地方の石窟とは異なっている。このように河西地方には莫高窟と同形式の中心柱窟は存在していない。

では莫高窟の中心柱窟は，西方から中心柱窟という石窟形式が伝えられた後，河西地方の諸石窟とは無関係に独自の発展を遂げたものと捉えるべきなのだろうか，あるいは他の地域との影響関係が認められるのだろうか。これらの問題について考察するため，次に莫高窟の中心柱窟における，中心柱の形式や龕の形式・配置を中心としながら，窟頂の形式，側壁に描かれる図像などについても言及していくこととする。

第２章　莫高窟中心柱窟の基本構造

先に述べたとおり，莫高窟の南北朝時代に造営されたとされる石窟のうち16窟が中心柱窟である。敦煌研究院分期によれば，中心柱窟は第１期にはなく第２期と第３期を中心に第４期まで続けて造営されている。

〈A〉基本構造

まずはじめに第２期に分期され，比較的早い時期に開かれたとされる第251窟を例にあげ，中心柱窟の基本的な構造を確認したい。

●プラン（図11―12）

長方形を呈し，石窟奥寄りに方形の中心柱が造られている。

●中心柱

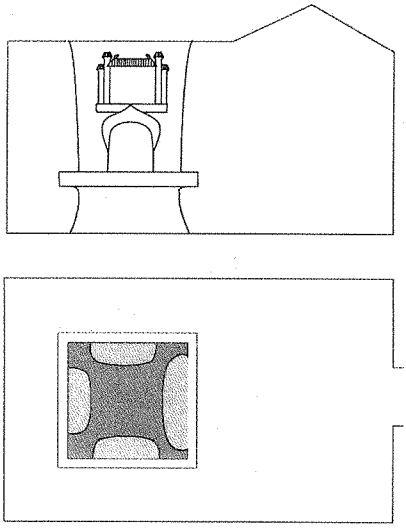

図11 莫高窟第251窟 平面·側面図

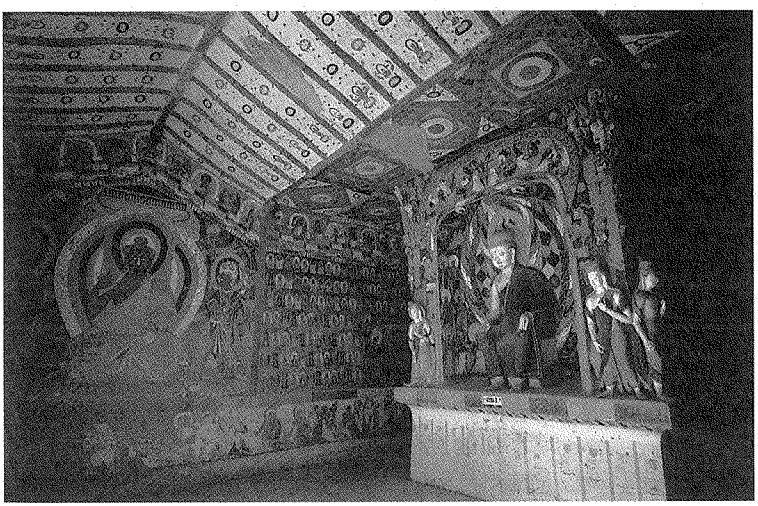

図12 莫高窟第251窟 石窟前部

図13 莫高窟第251窟北壁(示意図)

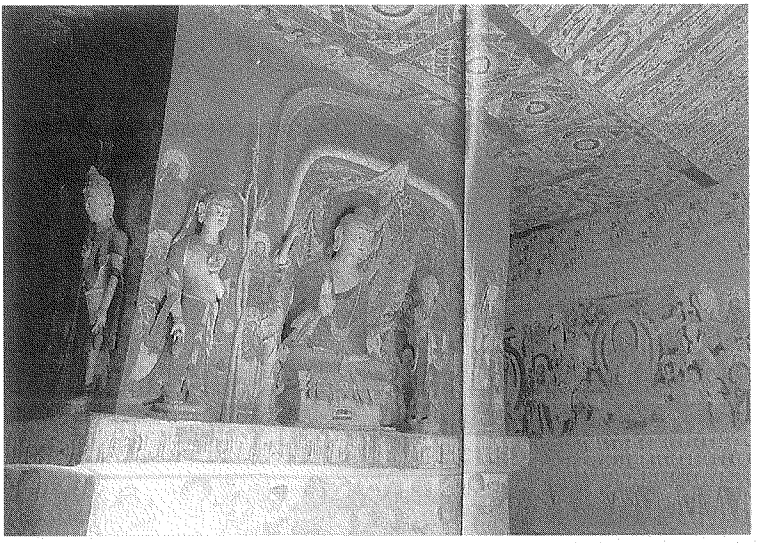

図14 莫高窟第428窟石窟前部

四面に龕を開く。東面（正面）のみ1龕，南北西の三面は二層に分かれ上下に龕が配されている。造像はすべて西方式服制である。正面の東面龕には倚坐仏像が配され，龕楣の上部は窟頂に達している。この龕楣左右に，影塑の胡坐し合掌する供養菩薩が貼付けられている。南北側面上層には闕形龕に交脚菩薩像，西面上層には双樹龕に趺坐仏像，各面の下層には円券龕に趺坐仏像が配されている。基壇部は正面が後補を受けるが，他の三面には力士図が描かれている。

●側壁（図13）

四壁とも上層に天宮伎楽図を描いている。側壁中層の人字披下には大画面の説法図を描いている。平頂下には千仏図と共に，中心柱下層の龕と対応する位置の南・北壁に小説法図を描いている。また西・東壁には千仏図のみが描かれている。

人字披の西端と平頂の接した位置の下壁面には，人字披を支える役目を担う柱が描かれている。

四側壁の最下層には，中心柱と同様に框と力士図を描いている。なお東壁は門口上部に明窓が開けられているが，現状は大部分が崩壊している。

●窟頂

窟前部の人字披には実際の木材を用いて梁や垂木を表している。垂木間には蓮華化生や蓮華を描いている。後部は平頂で中心柱を取り囲むように，ラテルネンデッケ図案が描かれている。

莫高窟の中心柱窟は第2期から第3期にいたるまで，プランが長方形で中心柱の四面に龕を開き，窟頂は中心柱の周囲を平頂にし，前部には人字披を築く，という点で一致している。さらに人字披には実際の木材を組んだり，側壁に柱を描くなど，地上の木造寺院からの影響を受けた構造といえる点も共通している。

しかし，基本的な構造は共通しているものの，例えば第4期に属する第428窟では中心柱が上下二層に分かれず，四面とも一層になっている。また中心柱以外に着目すると，第251窟では窟頂の人字披に実際の木材を組み梁や垂木を表しており，側壁には人字披を支える役目を担う柱が描かれているが，第428窟では人字披の梁や垂木は壁画で描くのみであり，側壁では柱図は描かれないという相違がみいだされる（図14）。

このように，一口に木造寺院から影響を受けた構造といっても，後期には簡略化が進んだ石窟が出現している。

さらに同じ二層の中心柱であっても細部は異なっている。例えば第２期の第251窟の中心柱南北側面上層には闕形龕が開かれ，交脚菩薩像が配されているが，第３期の第288窟は側面上層に闕形龕を開かない。また，第251窟では中心柱上層の龕外に何も造られていないが，第260窟では細長いテラス状の足場が造られている。

〈B〉石窟間の相違

先に述べたように莫高窟の中心柱窟において，各石窟間にみられる相違が最も明確なのが，中心柱や龕の形式，そして人字披の形態といえる。

敦煌研究院分期から離れ，これらの相違に基づき中心柱窟をいくつかのグループに分類するにあたっては，以下の４点が重要と考えられる。

① 中心柱の形態。(a)一層のもの（一層中心柱）と，(b)二層のもの（二層中心柱）がある。

② さらに二層の中心柱は，(a)上層の龕外に細いテラス状の足場がある，(b)足場がない，の二つに区分できる。

③ 中心柱に開かれる龕と造像の種類。特に闕形龕及び半跏菩薩像と交脚菩薩像の有無。

④ 窟頂人字披部分における木造建築表現。(a)木材を組む，塑土を盛り上げる，(b)壁画を描く，の二種類がみられる。

上記の４点に着目し，中心柱窟群を以下のＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ，４グループに分類した[23]。

第３章　中心柱窟の分類

Ａグループ　以下の四点の特徴を備える石窟である。

① 二層中心柱である。

② 中心柱の上層にはテラス状の足場が造られず，
　龕外に脇侍立像がみられない。

③ 闕形龕が開かれ，半跏・交脚菩薩像が造られる。

④ 窟頂人字披では，斗栱や垂木などに実際の木材を用いる。

これらの特徴を有する石窟は第251窟・第254窟・第257窟である。こ

の３窟は共に莫高窟南区中央第２層に造られている。

Ａグループのうち第251窟については先にその内容を述べたが，第254窟についても触れておきたい。

第254窟

●中心柱　　東面（正面）のみ１龕で，南北西の三面は二層に分かれ上下に龕が配されている（図15）。造像はすべて西方式服制で，東面主尊は交脚仏像である。東面龕は大きく，龕楣の上部は窟頂に達している。この龕楣左右に，影塑の胡坐し合掌する供養菩薩が貼付けられている。南北側面上層には闕形龕に交脚菩薩像，西面上層には双樹龕に趺坐仏像，各面の下層には円券龕に趺坐仏像がそれぞれ配されている（図16）。

また南北側壁の上方に，円券龕・趺坐仏像，闕形龕・交脚菩薩像を並べている点は他の中心柱窟ではみられず注目される。

●窟頂　　人字披には実際の木材を用いて斗栱や垂木を表している。垂木間には蓮華化生と蓮華を描いている。

Ｂグループ　以下の四点の特徴を備える石窟である。

①　二層中心柱である。

②　中心柱上層にテラス状の足場が造られ，
　　龕外に脇侍立像が並べられている。

③　闕形龕が開かれる。

④　窟頂人字披では，垂木などを塑土を盛り上げて造る。

これらの特徴を有する石窟は第260窟（第263窟）・第435窟・第437窟である[24]。このうち第260窟と第263窟は隣接して南区中央第２層に造られる。また第435窟と第437窟も隣接し南区中央第３層に造られている。

Ｂグループの石窟はＡグループと異なり，中心柱上層にテラス状の足場が造られ，龕外に脇侍立像が並べられている。この特徴が顕著なのが第260窟である。

第260窟

●中心柱　　中心柱の造像はすべて西方式服制で，東面主尊は倚坐仏像である（図17）。龕楣の上部は窟頂に届くほど高い。龕外の菩薩立像は北側が上半身裸体で，南側の像は絡腋を着けている。この左右に，影塑の胡坐し合掌する供養菩薩を数多く貼付けている。南北西の三面は上

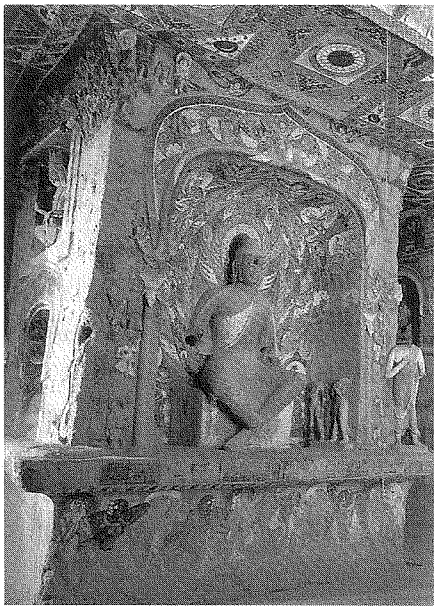

図15 莫高窟第254窟中心柱正面

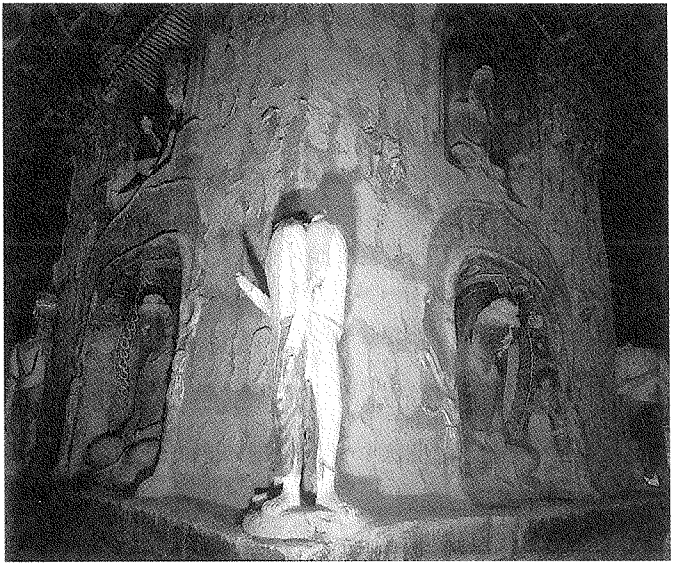

図16 莫高窟第254窟中心柱北西面

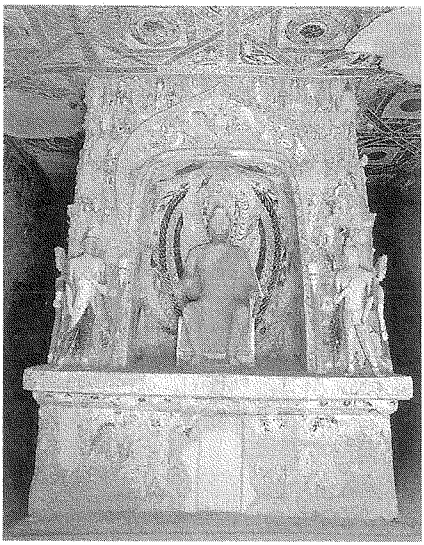

図17 莫高窟第260窟中心柱正面

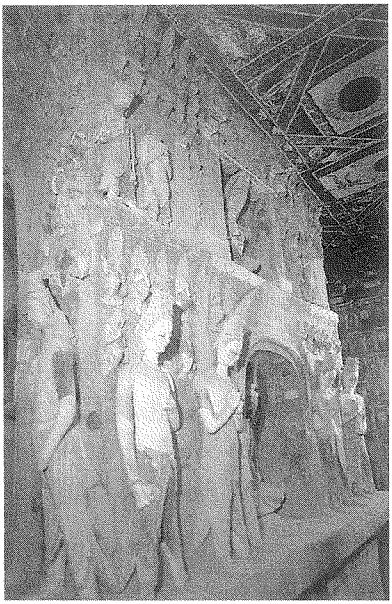

図18 莫高窟第260窟中心柱北面

下に龕が開かれ，さらに上層にはテラス状の足場が造られている（図18）。北面上層には闕形龕に交脚菩薩像，南面上層には闕形龕に半跏菩薩像，下層には双樹龕に苦行仏像，そのほかは円券龕に趺坐仏像が配されている。

上層のテラスには各面6体，下層には各面4体の脇侍立像が並べられている。脇侍菩薩立像の着衣には，絡腋を着ける像や通肩の像が多いが，西面下層南寄りの1体のみX字状天衣を着けている。第260窟は特に脇侍立像が多い石窟といえる。

●窟頂　人字披は泥塑を盛り上げて垂木を造り，垂木間には供養菩薩像を描いている。

Cグループ　以下の四点の特徴を備える石窟である。

①　二層中心柱である。

②　中心柱上層にテラス状の足場が造られ，
　　龕外に脇侍立像が並べられている。

③　闕形龕が開かれず，半跏・交脚菩薩像が造られない。

④　窟頂人字披では，垂木などを塑土を盛り上げて造る。

これらの特徴を有する石窟は第288窟・第431窟・第432窟の3窟である。第288窟は南区中央第2層，第431窟と第432窟は隣接して南区中央第3層に造られている。

Cグループの最も大きな特徴は，中心柱に闕形龕が開かれず，さらに半跏・交脚菩薩像も造られないことである。

第288窟

●中心柱　東面主尊は漢民族式服制の倚坐仏像である（図19）。頭部や両手は失われているが，体部はほぼ当初のままと思われる。大衣の胸元を大きく開け，内衣をみせている。大衣の先は左肩にかかり，その先端は段状に分かれている。このように大衣の末端が段状を呈している例は，第285窟主尊の倚坐如来像にもみられる。龕外の脇侍菩薩像は背面を柱体に密着させ，浮彫りのように薄い。龕外上方には影塑が4層にわたって貼付けられている。それらはみなほぼ同型の坐仏で，第428窟側壁の影塑に近い。

南・北・西の三面は上下二層に分かれ，上層にはテラス状の足場が造られている。三面の龕はすべてが円券龕で，闕形龕は造られない。尊像

図19 莫高窟第288窟中心柱正面

は南北側面はすべて，趺坐仏像だが，西面（背面）上層に交脚仏像，南面下層には苦行仏像を配している。

●窟頂　人字披の頂部には南北に細長い平頂があり，側面から見ると台形を呈している。泥塑を盛りあげ垂木を表し，垂木間には宝珠などを中心に，パルメット文や鳥類などが描かれる。

●その他　側壁に描かれたものだが，東壁（窟口左右壁）に供養人行列が描かれている点は特筆される。この行列は僧侶や高貴な人物と侍者などから成る。供養人行列を窟口左右壁のみに配する例は，第288窟以外の中心柱窟では確認できない。

Dグループ　以下の三点の特徴を備える石窟である。

① 一層中心柱である。

② 闕形龕が開かれず，半跏・交脚菩薩像が造られない。

③ 窟頂人字披では，垂木などを塑土を盛り上げて造る窟，壁画で描く窟，仏伝図を描く窟がある。

これらの特徴を有する石窟は第248窟・第290窟・第428窟・第442窟の4窟である[25]。第248窟と第290窟が南区中央第2層，第428窟と第442窟は南区中央第3層に造られる。

Dグループは，中心柱が二層に分かれず，四面に各一龕を開いている

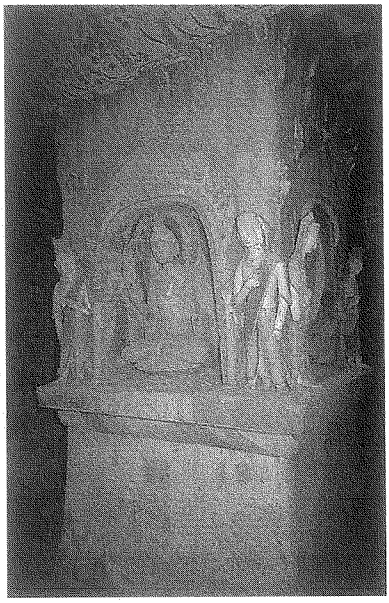

図20 莫高窟第248窟中心柱正面

点に大きな特徴がある。そしてCグループ同様に闕形龕は造られていない。一方，窟頂人字披は，他のグループとは異なっている。垂木などを壁画で描いたり，さらに第290窟では仏伝図を描くなど新たな形式が出現している。

第248窟

●中心柱　　正面主尊は西方式服制の趺坐仏像で，蓮台上に坐し両足をあらわしている。また大衣の胸元を開け，内衣をみせている。大衣の末端は左肩にかかるが，その先端はわずかだが段状に分かれている(図20)。

龕楣には火炎文を描き，両下端は大きな舌を出した鬼面を配している。これは中心柱窟では第248窟のみにみられる特徴である。龕外左右脇侍は共に左の肩から絡腋をまとっている。龕上にはいくつかの影塑が残存している。造営当初の状況を推測すると，龕頂上に主尊となる像を配し，これを中心に左右対称に供養菩薩が配されていたと考えられる。龕頂部から茎が延びており，中央部の供養菩薩像は蓮華上に坐してい

敦煌莫高窟　中心柱窟（南北朝時代）

石窟	中心柱の形態	東面(主龕)	東面像服制	北面	南面	西面(背面)	グループ分類
第2期 第254窟	二層	交脚仏	西方式	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 双樹龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	A
第2期 第251窟	二層	倚坐仏	西方式	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 双樹龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	A
第2期 第257窟	二層	倚坐仏	西方式	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 闕形龕 半跏菩薩 下層 双樹龕 苦行仏	上層 円券龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	A
第2期 第263窟	不明	不明	不明	不　明	不　明	不　明	B
第2期 第260窟	上層龕外に細い足場 二層	倚坐仏	西方式	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 闕形龕 半跏菩薩 下層 双樹龕 苦行仏	上層 円券龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	B
第3期 第437窟	上層龕外に細い足場 二層	倚坐仏	西方式	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 闕形龕 半跏菩薩 下層 双樹龕 苦行仏	上層 円券龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	B
第3期 第435窟	上層龕外に細い足場 二層	倚坐仏	西方式	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 闕形龕 交脚菩薩 下層 円券龕 跌坐仏	上層 円券龕 跌坐仏 下層 円券龕 苦行仏	B
第3期 第431窟	上層龕外に細い足場 二層	倚坐仏	西方式	上層 浅龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	上層 浅龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	上層 浅龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	C
第3期 第248窟	一層	跌坐仏	西方式	円券龕　跌坐仏	円券龕　跌坐仏	双樹龕　苦行仏	D
第3期 第288窟	上層龕外に細い足場 二層	倚坐仏	漢民族式	上層 円券龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	上層 円券龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	上層 円券龕 交脚仏 下層 円券龕 跌坐仏	C
第4期 第432窟	上層龕外に細い足場 二層	倚坐仏	漢民族式	上層 浅龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	上層 浅龕 跌坐仏 下層 円券龕 跌坐仏	上層 浅龕 跌坐仏 下層 円券龕 苦行仏	C
第4期 第428窟	一層	跌坐仏	漢民族式	円券龕 跌坐仏	円券龕 跌坐仏	円券龕 跌坐仏	D
第4期 第290窟	一層	倚坐仏	漢民族式	円券龕 倚坐仏	円券龕 倚坐仏	円券龕 交脚菩薩	D
第4期 第442窟	一層	倚坐仏	漢民族式	円券龕 倚坐仏	円券龕 倚坐仏	円券龕 倚坐仏	D

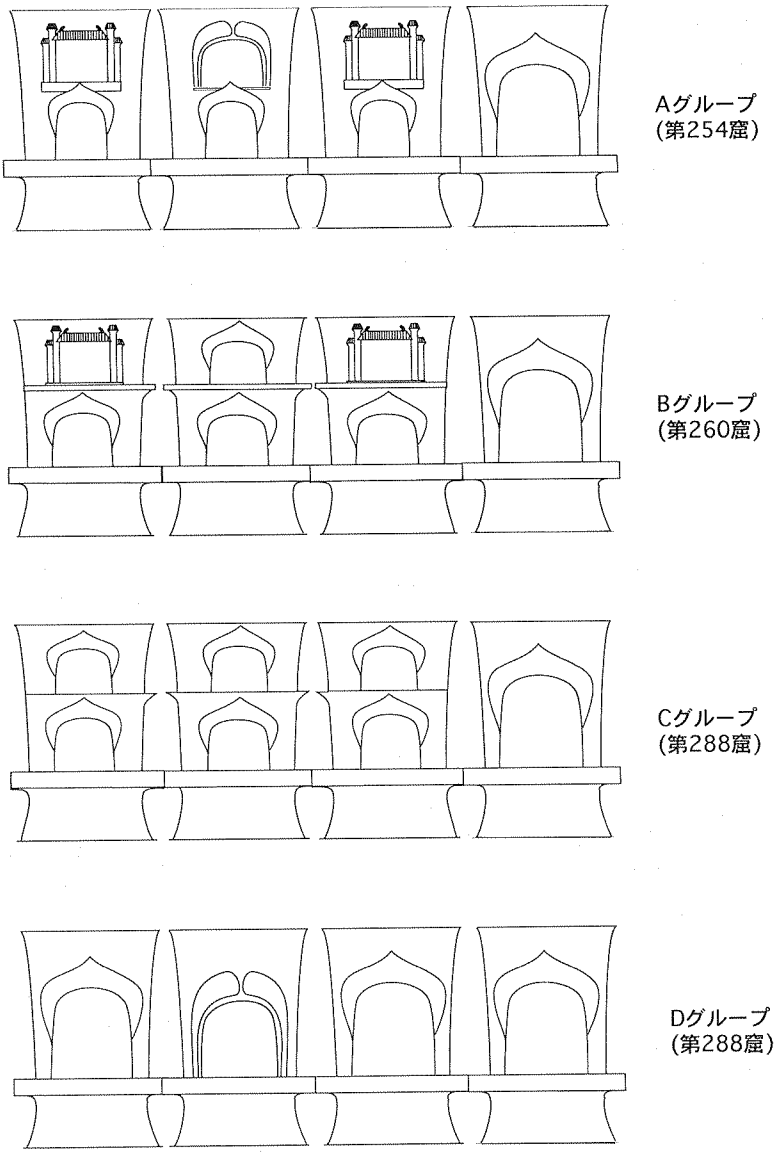

図21 各グループの中心柱(示意図) 左から順に,北・西・南・東(正)の各面

る。

南北面は共に円券龕が1龕開かれている。龕内には西方式服制の趺坐仏像があり，正面同様に蓮台に坐している。そして北面の龕上には宝珠，南面の龕上には水瓶を影塑であらわしている。一方，西面のみ双樹龕で，宣字形台座上に苦行仏像を配している。龕上には影塑の宝珠が貼付けられている。

●窟頂　人字披は第288窟と同様に，頂部に南北に細長い平頂があり側面から見ると台形を呈している。そして泥塑をもって垂木を表し，垂木間には足先を衣ですっぽりと覆った飛天や供養菩薩，そしてパルメット文などが描かれている。

以上の4グループの分類をまとめたものが92頁の表及び図21である。4グループの石窟はすべて南区中央第2層・第3層に造営されており，特にA・Bグループの石窟はそれぞれ近接して開かれている。

では次にA・B・C・Dという異なる4グループがなぜ出現したのかを考察し，グループ間の関係を明確にすると共に，造営された時期についてもより具体的な推測を試みたい。4グループの石窟は中心柱が二層か一層かという形式の違いによって，A・B・CグループとDグループに大きく二分される点は敦煌研究院分期と一致している。さらにA・B・Cグループのうち，すべての石窟が敦煌研究院分期の第2期または第3期とされる。そこでまず，A及びBグループから考察を進めることとする。

第4章　AグループとBグループ

〈A〉 AグループとBグループの相違

まず中心柱に配された如来像の服制について着目したい。大同雲岡石窟の第5窟・第6窟において，如来像の服制がそれまでの通肩や偏袒右肩という西方から伝えられた服制から，「漢民族式服制」と呼ばれる漢民族化したものへと大きな変化を示した。この如来像における服制の変化については様々な研究がなされているが，長廣敏雄氏が指摘したように，孝文帝による大和十年（486）の漢民族式服制への改革と関連すると考えられる[26]。また楊泓氏は，四川省茂県出土の南斉永明元年（483）の紀年銘を有する造像に漢民族式服制の如来像がみられることから，服

制の変化は先に南朝で起こり，その後雲岡石窟へ伝えられたとしている[27]。このような服制における漢民族化は如来像だけでなく，菩薩像や飛天などにも及んだ。漢民族式服制は雲岡石窟以外の各地の石窟や造像などにもみられ，洛陽龍門石窟では5世紀末から6世紀初頭に服制の変化が現われている。しかし莫高窟における漢民族式服制の如来像の出現は雲岡石窟や中原から遅れ，第285窟の造営された北魏末から西魏大統四，五年頃（538・539）と考えられている[28]。

中心柱正面主尊像の服制は次のとおりである。

西方式　　Aグループ，Bグループのすべての窟
　　Cグループの第431窟
　　Dグループの第248窟
漢民族式　　Cグループの第288窟・第432窟
　　Dグループの第290窟・第428窟・第442窟

このようにA・Bグループはすべて西方式服制で一致されているが，C・Dグループでは両方の服制が採用されている。したがって服制の変化は必ずしも石窟の造営年代と直接結び付くものではないと思われる。しかし一つの目安とすることは可能であり，敦煌研究院分期を合わせて考えても，A・BグループがC・Dグループに先行し，またA及びBグループの造営は重複する時期があった可能性があると思われる。

次にAグループとBグループの関係であるが，両者の間にみられる最大の相違は中心柱の上層に足場が造られるか否かという点であった。Aグループの中心柱上層の龕外には足場がなく脇侍立像はまったく造られていない。一方，Bグループでは中心柱の上層に脇侍像を並べているが，それらはみな細いテラス状の足場に載っている。Bグループのうち第260窟の中心柱上層では龕外左右に合わせて六体の脇侍立像が配されており特に多い[29]。ではなぜBグループの中心柱において，テラス状の足場が造られたのだろうか。

〈B〉テラス状の足場と河西諸窟の中心柱窟

中心柱上層龕外にテラス状の足場を設ける形態はBグループだけでなく，闕形龕を造らないCグループすべての中心柱窟で採用されている。ここで思いだされるのが河西地方の中心柱窟である。

先に述べた通り，河西地方の酒泉文殊山石窟千仏洞，万仏洞は共に中

心柱窟であり，両窟のプランはほぼ正方形で中心柱は四面とも基壇上が二層に分かれている（図7）。重要なのは上層の龕外にはテラスが造られていることである。上下層にはそれぞれ1龕開かれ，現在ほとんどが欠損しているが各龕内の尊像は趺坐仏像であったと思われる。龕外には塑像の脇侍立像が配されている（図8）。このほか金塔寺石窟東窟，西窟などの中心柱も上層の龕外にはテラスが造られ，脇侍立像が造られている。このように上層にテラスを設ける構造は，河西諸石窟の中心柱に比較的多くみられる特徴といえる。

このことからAグループとBグループの間にみられる中心柱の形態の相違は，たんにテラスの有無という構造の相違だけではないことが理解される。つまりテラスを設けるB及びCグループの中心柱の形態は河西諸石窟の中心柱窟との影響関係を示すものであり，河西諸石窟と比較するならば，むしろAグループのテラス状の足場を設けない中心柱の形態が例外的といえるだろう。

〈C〉 AグループとBグループの前後関係

それではA及びBグループのうちどちらが先に造営が開始されたのだろうか。莫高窟においてテラスを設けない中心柱はAグループのみにみられる。一方テラスを設ける中心柱はBグループだけでなく，Cグルー

図22 莫高窟第437窟中心柱正面上部

プにおいても続けて造られている。このようにBグループには，先の服制による考察で指摘したように遅れて開かれたグループと共通点があり，BグループはAグループに遅れて，造営が開始されたと推測される。

またBグループの第435窟，第437窟の中心柱正面の影塑は，主龕の龕頂上に主尊となる像を配し，これを中心として左右対称に供養菩薩像や飛天像が貼り付けられているが，同様の影塑の組合せはCグループの第248窟にもみられる。さらに第437窟中心柱の影塑では，飛天像の着衣形式は西方式服制ではなく漢民族式服制に変化している（図22）。このことからBグループの石窟のなかには，Cグループとほぼ同時期に造営されたものも存在すると考えられる。

第5章　CグループとDグループ

〈A〉闕形龕のない二層中心柱の出現と中原の石窟

Cグループの中心柱はすべて二層でテラス状の足場を持つが，南北側面上層に闕形龕を設けず，交脚菩薩像や半跏菩薩像を造らないという点でBグループとは異なっている。

A・Bグループでは，中心柱の南北側面上層に対をなして闕形龕が開かれ，交脚菩薩像や半跏菩薩像が配されていた。なぜ莫高窟において重要な存在であった闕形龕と交脚菩薩像や半跏菩薩像が造られなくなったのだろうか。Cグループのうち早期に造営されたとされる第288窟を中心に考えてみたい。

Cグループの第288窟は，西魏大統四・五年（538・539）の紀年銘を有する第285窟と隣接して開かれている（図23）。この第285窟については洛陽から派遣された東陽王元栄との関連も指摘され，北魏末から西魏にかけて造営されたと考えられている[30]。先に指摘したように第285窟と第288窟両窟の主尊は大衣の胸元を大きく開け，内衣をみせる漢民族式服制であるが，左肩にかかった大衣の先端が段状を呈している点で共通している。この二窟について宿白氏は両窟の壁画や造像の年代が同時期に属すると認め，西インドでのチャイティア窟とヴィハーラ窟（僧坊窟）を組合わせて造営する例や，新疆のキジール石窟における，石窟形式の異なる複数の石窟を組合わせて造営する例との類似性から，第288窟と第285窟の二窟が組合わせて造営された石窟である可能性を指摘され

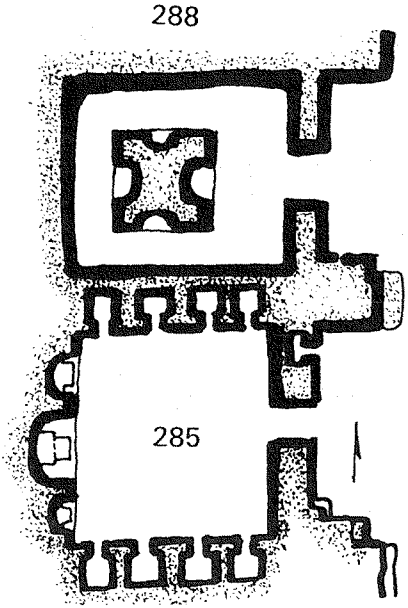

図23 莫高窟第285窟・第288窟 平面図

図24 莫高窟第288窟東壁南側供養人行列

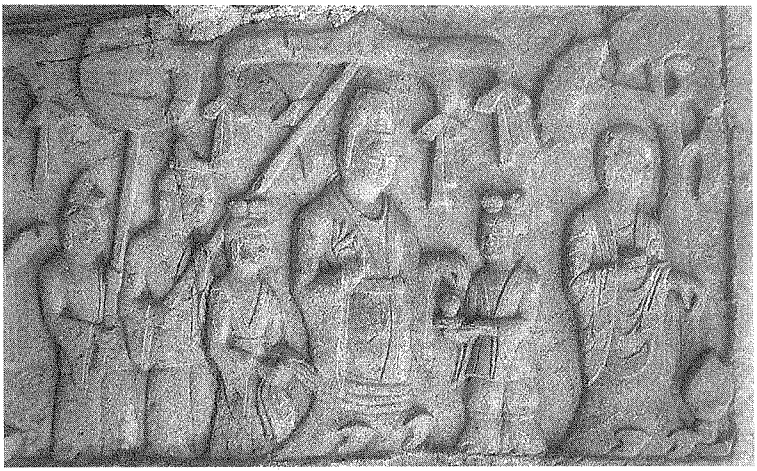

図25 鞏県石窟第４窟礼仏図浮彫

た[31]。この宿白氏の説に基づくならば，第288窟も北魏末から西魏に造営されたと考えられる。

ところで第288窟は壁画に他の中心柱窟にはみられない要素があらわれている。それは東壁（窟口左右壁）に描かれた供養人行列図である。東壁南側の供養人行列では，僧侶に先導される冠をつけた人物が描かれている（図24）。さらに裳裾を持つ侍者，蓋を捧げる侍者，団扇を持つ侍者三人が順に従っている。莫高窟において供養人行列を描く窟は多い。しかし前壁（東壁）の左右壁にだけ描かれ，しかも侍者を伴う供養人行列がみられるのは，第288窟のみである。莫高窟以外の北魏時代に造営された石窟の中で，侍者を伴う供養人行列を描く例が中原地方の石窟にみられることが知られている。龍門石窟では延昌四年から熙平二年（515～517）頃に造営された賓陽中洞の前壁（東壁）左右壁[32]や，孝昌三年（527）の紀年銘を有する皇甫公窟の側壁龕下などに礼仏図が浮彫されている。また北魏末（520年代）に造営された鞏県石窟においても確認される[33]。注目されるのは鞏県石窟で，第１窟，第３窟，第４窟が中心柱窟である。三窟共にプランは方形で平頂だが，第１窟，第３窟は一層中心柱，第４窟のみ二層中心柱となっている。また前壁（南壁）の左右壁には数段にわたって礼仏図が浮彫されている。このうち鞏県石窟第４窟では，第288窟と同様に，中心柱上層に交脚・半跏菩薩像が造られな

い。そして前壁の礼仏図には，僧侶に先導される冠をつけた人物と，裳裾を持つ侍者，蓋を捧げる侍者，団扇を持つ侍者が，第288窟の供養人行列と同様の順序で浮彫されている（図25）。このように第288窟には中原の北魏末に造営された石窟，特に鞏県石窟と共通点がみられることは注目に値する。そしてこのことからも，先に推測した第288窟の造営年代に間違いがないことが確かめられるだろう。

〈B〉一層中心柱の出現

Dグループは中心柱が一層という，他のグループとは大きく異なる形式を有している。またDグループの第248窟はたんに一層の中心柱というだけではなく，他の中心柱窟とは異なる特徴がみられる。それは中心柱正面の主尊が倚坐如来像ではなく趺坐如来像で蓮台に坐しており，西面（背面）の双樹龕内の苦行仏坐像が宣字形台座に坐している点である。側壁の天宮伎楽図中では人字披下に扉が半開きの建物が描かれ（図26），さらに端には奇妙な人物の頭部が描かれている。この扉が半開きの建物（図27）や奇妙な人物の頭部は，隣接する方形伏斗頂窟の第249窟においても描かれている。莫高窟では第249窟と第285窟において方形伏斗頂窟という新しい石窟形式の出現したわけだが，宿白氏はこの２窟の造営について，第285窟と同様に瓜州刺史東陽王元栄が洛陽から敦煌に赴いたことと密接な関係があると指摘している[34]。瓜州刺史元栄は北魏末の孝昌元年（525）以前に敦煌に派遣され，永安二年（529）には東陽王に封じられた[35]。実際，第249窟は第285窟同様に窟頂に天空を表現し，主尊像は漢民族式服制を着けるなど，それまでの莫高窟にはみられなかった新しい要素が現れ，第249窟の造営は北魏末から西魏初めとされる。以上のことから，第248窟も第249窟と同時期である北魏末から西魏初めに造営されたとすべきだろう。

〈C〉CグループとDグループの関係

CグループとDグループは，中心柱の形式が二層と一層であるという点においてまったく異なるものの，闕形龕を開かず，半跏菩薩像や交脚菩薩像を造らないなど，A及びBグループにはみられない多数の新たな要素を有するという点で共通している。

闕形龕を開かない二層中心柱（Cグループ）と，一層中心柱（Dグルー

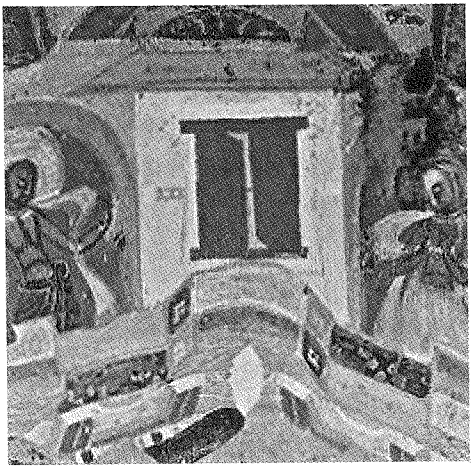

図26 莫高窟第248窟北壁人字披下

図27 莫高窟第249窟窟頂西寄

プ）の出現は，莫高窟における自立的な変化に因るものではないと思われる。なぜならば鞏県石窟において，一層中心柱と二層中心柱が共に造営されており，また中心柱に半跏・交脚菩薩像が全くみられず，第288窟にしても第248窟にしても，東陽王元栄の派遣に代表される中原と敦煌の交流に伴い，方形伏斗頂窟という石窟形式や漢民族式服制の如来像などと共に「闕形龕が開かれず，半跏・交脚菩薩像が造られない中心柱」，「一層の中心柱」という，新たな中心柱の形式が中原よりもたらされたと考えられるからである。そしてC及びDグループの中心柱窟の造営が開始されたのは比較的近い時期であり，その年代は第249窟，第285窟の造営と同時期の北魏末から西魏初めと推測される。

〈D〉一層中心柱の展開

C及びDグループは，ほぼ同時期に造営が開始されたと考えられるものの，その後主流となったのは，一層の中心柱であった。

Dグループのうち第428窟，第290窟では，中心柱東面主龕内に脇侍として弟子像を配している。また第428窟の南北西の三側壁には仏伝図を並べ，西壁（奥壁）には誕生や涅槃の場面が描かれている。莫高窟では早い時期から仏伝が描かれてはいたが，涅槃図はこの第428窟ではじめて表わされた。新疆キジール石窟の中心柱窟では石窟奥壁に涅槃図（像）を配することが一般的であったが，莫高窟では涅槃図を描く窟が北周の造営とされる第428窟まで出現しなかったことは注目される。さらに第290窟は人字披に垂木などを描かずに仏伝を描き，側壁上層には天宮伎楽図ではなく飛天を描いている。

本来，莫高窟の中心柱窟は木造寺院の内部構造の影響を受けて造営されたと考えられたが，石窟の基本的な構造は変わらないものの，人字披にも本生図が描かれるなど，特に第290窟では寺院内部を再現しようとする意識がかなり薄れたといえる。

その後，隋代に造営されたとされる第427窟では，石窟前部に人字披を築き後部を平頂にする窟頂の構造は変わらないものの，中心柱正面と人字披下に同型の大きな三尊立像を配するといった展開を示した[36]。しかし次第に方形窟の造営が盛んになり，それと共に中心柱窟は唐代に入るとほとんどみられなくなった。

〈E〉まとめ

これまでの考察から，以下の結論が得られる。4グループのうち，まずAグループが先行して造営が始められ，これに続いてBグループの造営が始められたと考えられる。AグループとBグループの間にみられる，中心柱にテラス状の足場があるか否かという相違は，単に構造の問題ではなく，テラス状の足場のあるBグループの石窟には河西諸石窟との影響関係が認められた。またBグループのなかには，造営時期がC及びDグループと重なる可能性のある石窟も存在する。

次にCグループは，先行するBグループの形式と新しく出現した形式が結び付いている。その新たな形式は莫高窟における自立的な展開によって生じたものではなく，瓜州刺史東陽王元栄が敦煌に派遣されたことに代表されるように，中原から新たな情報がもたらされたことと密接な関連があると思われる。そしてDグループについても同様に中原からの影響がみられる。よってC及びDグループは共に北魏末から西魏の比較的近い時期に造営が開始されたと考えられる。その後Dグループの一層中心柱が，形態を変えつつ隋代にも造営され続けた。

おわりに

以上，莫高窟の中心柱窟群について心柱の形態や龕の形式・配置，天井の形式など主に建築的要素の相違に着目し，これを手がかりとして石窟のグループ分類を試みた。その結果，中心柱窟を四つのグループに分類し，各グループについての大まかな造営順序を導き出すと共に，他地域の影響を受けることによって，新しいグループが出現したことがわかった。なかでも河西諸石窟からの影響がBグループになって現れたが，基本的にはAグループを引き継いでいる点は興味深い。続くC及びDグループは中心柱の形式が異なるものの造営が開始された年代は比較的近く，共に中原からの影響を受けている。しかしながらCグループは二層中心柱というAグループ以来の伝統をなお受け継ぐものであった。一方Dグループは一層中心柱というまったく新しい形式であり，隋代には主に一層中心柱が造られた。今後は石窟の建築的要素に着目するだけでなく造像様式や壁画の主題などについて考察をすすめ，中心柱窟を手がかりとして南北朝時代に造営された各地域の石窟についても新たな視点で

の再検討を試みていきたい。

最後に指摘したいのが，莫高窟において中心柱窟はどのように出現したのかという問題である。莫高窟最初期窟の第268窟・第272窟・第275窟および，敦煌研究院分期第２期のうち最も早くに開かれたとされ半中心柱窟とも称されるとされる第259窟はいずれも中心柱窟ではない。これらの石窟とＡグループの関係を考えると，例えばＡグループの第254窟は左右側壁の上方に龕を並べるが，同様に壁面に龕を並べる側壁の構成は，第259窟及び第275窟にもみられる。特に石窟左右側壁の上部に闕形龕を開き，半跏・交脚菩薩像を対称に配する点は，中心柱窟との関連で注目される。莫高窟で中心柱窟が造営されるにあたり，中心柱側面の上層に一対で半跏・交脚菩薩像を配する構成が採用されたことは，第275窟，第259窟を関連付けて考察する必要があると思われる。おそらく中心柱窟という石窟形式が伝えられ，第275窟，第259窟といった方形窟の壁画構成に影響を受け，自立的にＡグループの中心柱窟が造営されるに至ったという仮説が成り立つが，この問題については他の最初期窟の造営やその造像などを含め稿を改めて論じたい。

注

1） 史葦湘編「敦煌莫高窟大事年表(1)」『中国石窟　敦煌莫高窟一』平凡社 1980年

2） 樊錦詩・馬世長・関友恵「敦煌莫高窟北朝期石窟の時代区分」『中国石窟　敦煌莫高窟一』

以下，莫高窟中心柱窟各部の名称については，当論考に従った。

3） 宿白「敦煌莫高窟現存早期洞窟的年代問題」『中国文化研究所学報』第20巻　香港中文大学　1989年

4） なお中心柱窟については，方柱窟，塔柱窟，中心塔柱窟，塔廟窟など様々な名称があるが，小論では『中国石窟　敦煌莫高窟一』に従い「中心柱窟」と呼ぶことにしたい。

5） 水野清一「北支那石窟構造論」『史林』第23巻第１号　1938年

水野清一・長廣敏雄「序章　雲岡石窟の系譜」『雲岡石窟』第６巻　京都大学人文科学研究所　1952年

蕭然「敦煌莫高窟の石窟形式」『中国石窟　敦煌莫高窟二』平凡社 1982年

6） 高田修「インドの石窟寺院」『佛教藝術』第41号　毎日新聞社　1959

年　9頁

7）　高田修「インドの佛塔と舎利安置法」『佛教藝術』第11号　毎日新聞社　1951年　73頁

8）　西北インドに分布する石窟については，主に次の論考を参照した。

水野清一編『ハイザクとカシュミルスマスト』京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告　1962年

水野清一編『ハザールとムフィル-ハーナ』京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告　1967年

水野清一編『バサーワルとジェラーラーバード-カブール』京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告　1971年

9）　前出『バサーワルとジェラーラーバード-カブール』　52頁

10）　前出『バサーワルとジェラーラーバード-カブール』　51頁

11）　晁華山「20世紀初頭のドイツ隊によるキジル石窟調査とその後の研究」『中国石窟　キジル石窟三』平凡社　1985年　249-254頁

12）　馬世長「キジル石窟中心柱窟の主室窟頂と後室の壁画」『中国石窟　キジル石窟二』平凡社　1984年

13）　宮治昭『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館　1992年

14）　段連勤「公元五世紀上半葉高昌歴史発微」『西北史地』1988年第4期

15）　賈應逸　須藤弘敏訳「トヨク石窟考」『佛教藝術』第186号　毎日新聞社　1989年

16）　前出「トヨク石窟考」『佛教藝術』第186号　毎日新聞社　1989年9月　訳者補記80頁

17）　前出「トヨク石窟考」　75頁

18）　クチャ周辺の石窟のうち，シムシム石窟第26窟など中心柱の四面に龕を開く中心柱窟もわずかながら存在するとされるが，その詳細や造営年代等は不明である。

19）　『大正新脩大蔵経』第23巻　No. 1435

5世紀初頭には，いくつかの律経典が続けて漢訳されたが，6世紀初頭までの約百年間には，主に『十誦律』のみが研究されていたとされる。（平川彰『日本仏教と中国仏教』春秋社　1990年　161頁）

20）　宿白「涼州石窟遺迹和“涼州模式”」『考古学報』1986年第4期　438頁

21）　暨遠志「酒泉地区早期石窟分期試論」『敦煌研究』1996年第1期

八木春生「河西石窟群年代考—兼論雲岡石窟與河西石窟群的関係」『台湾大学美術史研究集刊』第4期　1997年　16頁

22) 董玉祥「河西走廊馬蹄寺，文殊山，昌馬諸石窟群」『河西石窟』文物出版社　1987年

前出「河西石窟群年代考—兼論雲岡石窟與河西石窟群的関係」16頁

23) なお第246窟・第265窟は後代の重修によって当初の造像や壁画がすべて損なわれているため，考察の対象外とした。

24) 第263窟は中心柱が全面的に後補され，当初の形態は不明である。しかし，側壁をみると人字披下に千仏図と共に降魔成道図，鹿野苑説法図が描かれるなど，第260窟と類似する点があることから，Bグループに含めておきたい。

25) 第442窟については写真資料等がまったくないため，石窟の構造や造像などについては次の論考に拠った。

「敦煌莫高窟内容総録」『中国石窟　敦煌莫高窟五付篇』平凡社　1992年

東山健吾「敦煌莫高窟北朝期尊像の図像的考察」『東洋学術研究』第24巻　第1号　1985年

26) 長廣敏雄『大同石窟芸術論』高桐書院　1946年

27) 楊泓「試論南北朝前期仏像服飾的変化」『考古』1963年第6期

28) 莫高窟における造像の服制については次の論考を参照した。

鄧健吾「敦煌莫高窟彩塑の展開」『中国石窟　敦煌莫高窟三』平凡社　1981年12月

『敦煌石窟学術調査（第一次）報告書』東京芸術大学美術学部　1985年

岡田健・石松日奈子「中国南北朝時代の如来像着衣の研究（上，下）」『美術研究』第356・357号　1993年

八木春生「X字状天衣についての一考察」『上原和博士古稀記念美術史論文集』1995年

29) そのほかの窟の中心柱では，基本的に龕外左右合わせて二体の脇侍立像が配されている。

30) 東山健吾『中国三大石窟』講談社選書メチエ　1996年　86頁

31) 宿白「参観敦煌莫高窟第285号窟札記」『中国石窟寺研究』文物出版社　1996年（この論文は『文物参考資料』1956年第2期に発表され，その後加筆された。）

32) 温玉成「龍門北朝期小龕の類型と分期および北朝期石窟の編年」『中国石窟　龍門石窟一』平凡社　1987年

33) 陳明達「鞏県石窟の開鑿年代とその特徴」『中国石窟　鞏県石窟』平凡社　1987年

34) 宿白「東陽王與建平公（二稿）」『中国石窟寺研究』文物出版社　1996年

35) 『魏書』「孝莊記」巻10　中華書局　1974年　254頁

36) 莫高窟の隋代における中心柱窟も多様な展開を示している。これらの問題については，再度現地での観察をふまえた上で詳論したい。

図　版

1　カールリー石窟チャイティア窟　平面・側面図
高田修「インドの石窟寺院」『佛教藝術』第41号　毎日新聞社　1959年　挿図70

2　バサーワル石窟第70洞　平面・側面図
水野清一編『バサーワルとジェラーラーバード-カブール』京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告　1971年　Fig. 8

3　キジール石窟中心柱窟　透視図
『中国美術全集　新疆石窟亀茲石窟』文物出版社　1988年　11頁挿図

4　キジール石窟第38窟　平面・側面図
『中国石窟　キジル石窟一』平凡社　1983年　229頁

5　トヨク石窟第38窟　平面図
賈應逸　須藤弘敏訳「トヨク石窟考」『佛教藝術』第186号　毎日新聞社　1989年　図4

6　天梯山石窟第1窟（左）・第4窟　平面・側面図
張宝璽「河西北朝中心柱窟」『敦煌石窟研究国際討論会文集　石窟考古』遼寧美術出版社　1990年　図8

7　文殊山石窟千仏洞（左）・万仏洞　平面・側面図
『河西石窟』文物出版社　1987年　挿図11・12

8　文殊山石窟万仏洞　中心柱南面上層
『河西石窟』文物出版社　1987年　挿図113

9　金塔寺石窟東窟　平面・側面図
『河西石窟』文物出版社　1987年　挿図3

10　金塔寺石窟東窟　中心柱西面
『河西石窟』文物出版社　1987年　挿図4

11　莫高窟第251窟　平面・側面図

12　莫高窟第251窟石窟前部
東山健吾氏撮影

13　莫高窟第251窟北壁（示意図）

『中国石窟　敦煌莫高窟一』の図版を合成

14　莫高窟第428窟石窟前部

『中国石窟　敦煌莫高窟一』　図160

15　莫高窟第254窟中心柱正面

『中国石窟　敦煌莫高窟一』　図26

16　莫高窟第254窟中心柱北西面

『敦煌石窟藝術　莫高窟第254窟』江蘇美術出版社　1995年　図32

17　莫高窟第260窟中心柱正面

『中国石窟　敦煌莫高窟一』　図58

18　莫高窟第260窟中心柱北面

『中国石窟藝術　莫高窟第254窟』　図125

19　莫高窟第288窟中心柱正面

東山健吾氏撮影

20　莫高窟第248窟中心柱正面

東山健吾氏撮影

21　各グループの中心柱（示意図）

22　莫高窟第437窟中心柱正面上部

『中国石窟　敦煌莫高窟一』　図64

23　莫高窟第285窟・第288窟　平面図

宿白「参観敦煌莫高窟第285号窟札記」『中国石窟寺研究』文物出版社　1996年　挿図１

24　莫高窟第288窟東壁南側供養人行列

東山健吾氏撮影

25　鞏県石窟第４窟礼仏図浮彫

『中国美術全集　彫塑編13』文物出版社　1989年　図55（二）

26　莫高窟第248窟北壁人字披下　半開きの扉

『中国石窟　敦煌莫高窟一』　図84

27　莫高窟第249窟窟頂西寄　半開きの扉

『中国石窟　敦煌莫高窟一』　図97